

桐壺更衣の和歌をめぐって

吉田幹生

ある表現についての小さな解釈の変更が、物語の読み取りを大きく変えてしまうことがある。それが意図的になされたものであればよいが、十分な検討を経ずに行われた場合は、問題の所在に気づくことすら難しい。特にその変更が「誤読」に基づくものだとすれば、小さな誤読が思わぬ結果をもたらすことになりかねない。

本論では、そのような例の一つとして、『源氏物語』桐壺巻における桐壺更衣の和歌をめぐる諸問題を取り上げたい。少し長いが、前後を含めて引用しよう。

A 限りあれば、さのみもえとどめさせたまはず、御覧じだに送らぬおほつかなさを言ふ方なく思ほさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でも聞こえやらす、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧するに、来し方行く末思しめされず、よろづのことを泣く泣く契りたまはず、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどいまとたゆげにて、いと

どなよなよとわれかの気色にて臥したれば、いかさまにと思しめしまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひてさらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、

「かぎりとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけりいとかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、「今日はじむべき祈禱ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかてさせたまふ。

(桐壺①二二―三)

和歌に続く言葉が、「いとかく思ひたまへましかば」と言いさして終わっているように、ここで桐壺更衣が帝に伝えようとした思いが十全に開陳されることはなかった。物語としては、あえて帰結部を伏せたということなのであろう。しかし「聞こえまほしげなること

はありげなれど」と続いており、読者の想像力は掻き立てられる。言わば、記されなかつた更衣の思いに、読者の関心が向かうように仕組まれている趣なのである。

この言葉について、『花鳥余情』は「更衣の哥にいかまほしきは命なりけりとおもふやうならましかはの心也御門の御返哥なきにて御心も心ならずおほしまとへるほとはしるへきなり」と施注した。本論で注目したのは、この前半部「いかまほしきは命なりけりとおもふやうならましかはの心也」という部分である。

更衣の発言における「かく」の内容を直前の和歌と結び付け、文脈指示の語として解そうとした『花鳥余情』に対して、後統の『弄花抄』や『細流抄』はそれぞれ、「此語尤も感有と云々かねて万頼みし心の外に成ぬる事をおもふ詞也世上もみな如此なるへし花鳥義別也」「花儀非歎かねてよろつたのみし心のほかに成ぬる事を思詞也」昨日けふとは思はさりしをといふかことし」とし、これまで期待していたように物事が進んでいないことを思ったものとして、この発言を理解しようとした(一部)。物事が進まない原因は更衣が病臥してしまったことだから、結局この理解は「かく」を病に臥せている現状を指したものの、すなわち現場指示の語として捉えたことになる。

そして、『細流抄』に在原業平の辞世歌「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」(古今・哀傷・八六一)が参照されているように、病臥を通して死を自覚したと考えるとこ

ろから、「かくのことくみしかゝるべき命の程をかねてしらすして契をきけるよと也」(岷江入楚・箋(三条西実枝))という、帝との関係を後悔する思いが読み取られていくことになった。こうして、

この「たまふ」は謙譲の助動詞、下二段に活用。「思う」は「思ひ」の音便形。このあとに、更衣はなんとおおうとしたのであろう。

「申し上げておきたいことが数々ございましたの」か。「おそばに参るのではございませんでしたの」か。後者と考える。自己を主張しない更衣であり、「なか／＼なる物思ひ」(五三行)をする更衣であるから。前者であれば、すぐあとに「きこえまほしげなることはありげなれど」と、作者がそこをわけてしまったことになる。この作者はそういう書き方をしない人であるから。

〔玉上評釈〕

・「…ましかば…まし」の形で、反実仮想の構文。…であつたら…であろうに。ここでは初めからこうなることが分かっていたら、なまじ帝のご寵愛をいただかなければよかつたらうに、の意か。遣されるわが皇子の将来を頼みたいところだが、と解する説もあるがとらない。更衣は、「…まし」までは言いおおせることができず、右の歌のほか言うべき言葉を知らない。

〔新全集〕

といった今日の通説が形成されてきたのだと思われる。

このような通説形成の出発点に位置するのが「かく」であり、冒頭の言い方を用いれば、文脈指示から現場指示へという「かく」についての小さな解釈の変更が、更衣の後悔という書かれざる心情を

浮かび上がらせることに繋がったということになる。ことが作中に明示されない帰結部の解釈にかかわるだけに、読者の自由な裁量に委ねられている事柄だとも言えそうだが、当該「かく」を現場指示と解したことは、はたして妥当な処置だったのであろうか。

二

前掲②部のような理解は既に『源氏物語聞書』に見られるもののようにだが、肖柏や三条西実隆が、『花鳥余情』の解釈を非とし、「かく」を文脈指示としなかったのは何故なのか。ことは多面的に考察されねばなるまいが、ここでは『花鳥余情』のように解してしまうと、反実仮想の働きによつて、「いかまほしき」とは別のところにいる。この時点での更衣の思いがあったことになりかねない点に着目したい。

三条西家の源氏学を受け継ぐ『孟津抄』に

かきりあらん道にもをくれさきた、しとちきらせ給けるをさりともうちすて、は行やらしとの給はするを更衣のいみしく見たてまつりてこれほとまておほしめしてなげかせ給ふ程に君のためいかまほしきと也た、哥のおもてはかりとみては感情あさく侍也花鳥に御門の御返哥なきにて御心も心ならずおほしまとへるほとはしるへき也と云々

と記されているように、当該場面からは、帝と更衣の心の交流が感じ取られていた。『花鳥余情』の後半部「御門の御返哥なきにて御心も心ならずおほしまとへるほとはしるへきなり」が引き継がれて

いる点からも、それは明らかであろう。それゆえ、帝の言葉に感動した更衣は「君のためいかまほしき」と願っており、それが更衣の真情だと読み解くのである。

そうである以上、ここでの更衣が「いかまほしきは命なりけりとおもふやうならましかは」などと仮定するはずがないというのが、肖柏や実隆の認識だったのではないか。『花鳥余情』に先立つ『源氏物語提要』にも、更衣歌について「時にのそみて心のま、の御歌なり。哀ふかし。いかまほしきとは、た、いきたきと云ふことはなり。みかとの御こ、ろふかくおはしますをいとをしみ奉りて、わか身のきえゆくよりも君の御こ、ろの切なるをおもひたてまつれば、みかとの御為にいきたきとの御歌也」とあるように、ここに更衣の真情を読むのは、珍しい解釈ではなかったと推測される。だからこそ「いかまほしきは命なりけり」という歌の思いはそのままにして、「かく」を文脈指示ではなく現場指示と解し、その内容をこれまで期待していた通りに事が進んでいないことを思ったものという方向に軌道修正したのである。言わば、「いとかく思ひたまへましかば」の内実を和歌から遠ざけることで、現在の「いかまほしき」という真情と抵触しないように解釈を変更した、ということである。

こうして、「かく」は直前の和歌から切り離されることになった。それが部の「かねて万頼みし心の」云々という解釈である。その結果、生きたいという願望とそれを妨げる現実との板挟みになった更衣の心情として反実仮想の帰結部が掘り下げられ、更衣の後悔が読み取られてきたのではないか。

しかし、右の推論が当たっていると、そもその発端は「かく思ふ」に反実仮想の「まし」が接続する点にあったはずである。現場指示にせよ文脈指示にせよ、「かく」とはつきり指示している以上、それが反実仮想と結びつくのはすぐには理解しがたい。とすれば、考察の焦点は、「かく」ではなく「まし」の方にまずは絞られるべきであろう。それゆえ、以下ではまず「まし」の問題からこの変更について検討してみることにした。

反実仮想の「まし」に、「心をばなげかざらまし命のみさだめなき世と思はましかば」(浮舟⑥一三三)のように、現在の事実を否定して仮想する用法が多いのは確かである。しかし、「宮城野の小萩がもとと知らませば露も心をわかずぞあらまし」(東屋⑥八〇)のように、過去の事態を仮想する用例も認められる。後者の例は、「〜ということを知っていたら」となる場合が多く、

かからむとかねて知りせば大御船泊てし泊まりに標結はましを (万葉・2・151・額田王)

忘れ草種とらましを逢ふことのかくかたきものと知りせば (古今・恋5・七六五)

のように、動詞にはしばしば「知る」が用いられる。しかし、「思ふ」の例がないわけではない。

・(光源氏)「かく世を離るべき身と思ひたまへましかば、おなじくは慕ひきこえましものをなごなむ。…」(須磨②一九五)
 ・なごり恋しくて、いとかく思はましかば、月ごろも今まで心のかならましましやなど、帰らむこともものうくおぼえたまふ。

(総角⑤三三九)

といった例がそれである。須磨巻の例は、光源氏が六条御息所に宛てた手紙の一節で、このように都を去ることになるのだとわかっていたら伊勢に下向したあなたに着いて行けばよかった、というもの。総角巻の例も、大君と一晚過ごした薫が、このようになごり恋しく思うのだったらこれまでとても悠長には過せなかつただろう、と過去を振り返つてのものである。いずれも、現在の思いを過去に遡らせて、もつと前からこのような思いを抱いていたら…と考える例である。それゆえ、『弄花抄』や『細流抄』のように、仮想される事態の時制を現在から過去にずらすことで当該「まし」を解釈しようとしたのは、あり得る処置であつたと判断される。

では、「かく」についてはどうであろうか。当該例と同じく、和歌の直後に「かく思ふ」とある場合には以下のようなものがある。

・(匂宮)「長き世を頼めてもなほかなしきはただ明日知らぬ命なりけり

いとかう思ふこそゆゆしけれ。心に身をもさらになまかせず、よるづにたばかりらむほど、まことに死ぬべくなむおぼゆる。つらかりし御ありさまを、なかなか何に尋ね出でけむ」などのたまふ。(浮舟⑥一三三)

・(仲忠)「浅き瀬に嘆きて渡る筏師はいくらのくれかながれ来ぬらむ

かく思う給へては久しくなりぬるを、いかで、今宵だに、一言だに聞こえさせてしかな。いらへこそそのたまはざらめ。聞

こし召すばかりには、何の罪もあらじ」とてなむ奉る。

(うつほ物語・祭の使・二三六)

・(道頼)「あが君や、さらにえ聞こえぬものになむ

あふことの難くなりぬと聞く宵は明日を待つべき心こそ

せぬ

かうは思ひきこえじ」とのたまへば…

(落窪物語・巻一・一一〇)

・(中納言)「忍ぶれど面影山のおもかけはわが身をさらぬ心地の
みして

などかくしも思ふべき」と、せめて思ひくたし思ひ覚ますにも、
なほあはれに堪へず、うち嘆かれつつぞ書きたまふ。

(夜の寝覚・巻一・三八)

これらはいずれも、直前に詠まれた和歌の内容を「かく」が指している
と考えて問題ないものである。和歌に続く一続きの発言ないし
思考の過程で用いられる「かく」が、直前の和歌を指すことに違和
感はない。とすれば、当該例の場合も、「かく」は和歌を踏まえた
ものと考えるのが穏やかではないか。

また、内省の及ばない事柄ではあるが、「初めからこうなること
が分かっていたら」(新全集)のような意を表すのなら、「かからむ
と思ひたまへましかば」と表現されていたように思われる。たとえ
ば、

・昔、わが身にあらむことは夢にも思はで、あはれに心すごき
こととて、はた、高やかに、絵にもかき、ここのちのあまりに

言ひにも言ひて、あなゆゆしとかつは思ひしさまにひとつた
がはずおほゆれば、かからむとて、ものの知らせ言はせたり
けるなりけりと、思ひ臥したるほどに…

(蜻蛉日記・天禄二年六月・二三六)

・(俊蔭娘)「いで、さらなりや。思ひ出づれば、いとみじ。親
の撫で養ひ給ひし時は、我、『かからむ』とやは思ひし」とて、
いみじう泣きて…

(うつほ物語・俊蔭・三四)

の「かからむと」を「かく」とは置き換えがたかろう。「かく思ふ」
という言葉は、「このようになる」と思う」といった時間変化を
含まず、現場指示と考える場合でも、現在の思考内容を指して「こ
のように思う」という意味にしかならないように思われるのである。

つまり、「かく」の処置については、用例や言い回しの点で、現
場指示と解するには少し無理が感じられるということになる。『弄
花抄』や『細流抄』が抱いたと思われる違和感には肯ける点もある
が、それは「まし」を再考することで解決される事柄だったので
ないか。言い換えれば、「かく」を現場指示と解さなければならな
い積極的な根拠は、見出しがたいということである。それゆえ、違
和感解消のために「かく」の解釈を変更したとすれば、それは勇み
足だったと言うほかない。当該「かく」を文脈指示とする論文も既
に存在しており、『新大系』にも「かく」は歌のなかの生きたい
という思いを指す」と明言されていることであるが、本論でも、改
めてこの点を確認しておきたい。

三

ここで視点を変えて、従来の説に従って物語を読んだ場合、何を見落とすのかということについて考えてみたい。それは、「かく」を更衣の和歌と結び付けた時に、どのような解釈が成り立つのかを考えることもある。

あらためて、桐壺更衣の和歌は、どのような思いを表現したものであろうか。当該歌については、「今は、それが定めとお別れしなければならぬ死出の道が悲しく思われますにつけて、私の行きたいのは生きる道のほうでございます」（新全集）、「寿命の限りとて（道が分かれば）お別れして行く死出の道が悲しいにつけて、生きたいのは（行きたい道は）命であったことだ、死出の道に行きたいのでなくて」（岩波文庫）のような現代語訳が施されている。諸注おしなべて、上二句の「かぎり」と別るる道」を「死出の道」と解するのである。

この解釈は、直前の「限りあらむ道」に対応するものとしてこの句を捉えるところから導かれたものであろう（『孟津抄』など）。なるほど、言葉の対応という点で、両者は無関係とは言えない。しかし、帝の言葉との対応関係は、もっと多面的に考察される必要がある。

第三句に「悲しきに」を置く和歌は

かしこまる事侍りて里に侍りけるを、忍びて曹司に参れりけるを、おほいまうちぎみの「などか、音もせぬ」など怨み侍りければ

我が身にもあらぬ我が身の悲しきに心も異になりやしにけん

女四宮かくれたまひてのち
(後撰・雑3・二〇〇・大輔)

こころよを聞くが中にも悲しきに人の涙ははてやしぬらん

(伊勢集・四四七)

絵に、人の、親の寝たる間に尼になれるところ

常ならぬ世を見るだにも悲しきに夢さめて後思ひやるかな

(実方集・四三)

のように、「Xでさえ悲しいのにYはますます悲しい」という関係を内包することが多い。後撰集歌でいえば、謹慎すべきことがあって里下がりにしていたが、こっそり曹司に来てみたところ「どうして連絡がないのか」と怨み言を言われたことに応じた歌で、謹慎という事態でさえ「我が身にもあらぬ我が身」であり悲しいのに、あなたへの連絡を忘れるくらいに「心」までもが自分の心でなくなってしまうとしたらますます悲しい、という関係を内に含みつつ、その思いを下句で「心も異になりやしにけん」と表現しているのである。実際のやり取りにおいては、そのような対応が「謹慎中でそれどころではないとのことわり」（和泉叢書）として働くにせよ、表現そのものとしては、右のような関係が前提となつていよう。あるいは伊勢集歌であれば、これまで数多くの不幸な出来事を耳にしてきた中でも女四宮の薨去はとりわけ悲しいのに、まして関係者であるあなたはおさら悲しいだろうというところから、「人の涙ははてやしぬらん」という下句になるのだと考えられる。「だに」を用

いる実方集歌はこの点が明瞭で、無常な世の中を見るだけでも悲しいのに、目が覚めて娘が尼になった姿を見たらますます悲しいだろう、という思いが「夢さめて後思ひやるかな」と表現されているのである。

このような関係性は、『源氏物語』の他の用例「おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫」(賢木②八九)についても指摘できる。これは、野宮の別れの場面で、六条御息所が詠んだものである。伊勢下向を目前に控えた御息所を訪れた光源氏は、その翌朝「あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな」(賢木②八九)と詠みかける。一般的な後朝の別れ(「あかつきの別れ」)でさえ悲しいのに、あなたが伊勢へ旅立ってしまうと思うと今朝の別れはこれまで経験したことのないくらいに悲しい、というのである。その源氏の贈歌に応じるように、御息所も、秋の別れというだけでも悲しいのに、あなたと別れる今朝はますます悲しいという関係性を内包させて、折知り顔で鳴く松虫について「鳴く音な添へそ野辺の松虫」と詠んでいるのだと考えられる。重要なのは、「おほかたの秋の別れ」の悲しさゆえに、「鳴く音な添へそ野辺の松虫」と詠まれているのではなく、そこから想像される、よりいっそう悲しい事態(源氏との別れ)を前提として、下句が詠出されている点である。

第三句に「悲しきに」を置く和歌が右のように読み解かれるものとすれば、当該歌の場合も、「かぎりとして別るる道」でさえ悲しいのに、Yという事態はますます悲しいという関係を前提として詠

まれたものと考えるべきであろう。X↓Y↓Zという認識の展開を「Xの悲しきにZ」と表現するのが、この型の和歌なのである。当該歌における上句と下句の間にはある種の矛盾を感じ取られてきたが、それはこのように考えることで解消されるのではない。

いよいよ衰えていく桐壺更衣を前にして、桐壺帝は「輦車の宣旨」を与えるものの、それでも別れの決心がつかずに「さりともうち棄ててはえ行きやらじ」と訴えかける。この言葉を、『源氏物語注釈』は「それにしても私一人を残して死出の道に旅立つことはできないでしょう」と解するが、従えない。ここで話題になっているのは桐壺更衣の退出であり、ここが里邸への退出である点は動かすべきではない。また、「行く」は退出する意味に死出の道を行く意味がかかる(「新大系」と重層的に解するのも、文脈をいたずらに複雑化するだけであろう。死出の道が帝の意識にのぼっていることは疑い得ないが、ここは、「限りあらむ道にも後れ先立たじ」という過去の約束を根拠に、あくまでも当面の話題にかんして、死出の道さえ一緒に行こうと約束したのだから、いくら重篤な状態にあっても、私一人を残して里邸に退出することなどできないでしょう、と限定的に訴えた文脈と解すべきではない)。

その言葉に「いといみじ」と感じて応じたのが、桐壺更衣の和歌であった。とすれば、「かぎりとして別るる道」は里邸への退出を意味し、里邸に退出することさえ悲しいのに、このままあなたと死別するようなことになったらますます悲しい、と応じたとするのが素直であろう。この場合の「かぎり」は前掲A冒頭の「限りあれば、

さのみもえとどめさせたまはず」と文脈上は響き合うものであり、帝がどんなに留めようとも宮中の掬ゆえに行かねばならない道の意だと考える。しかし、更衣が里邸に退出するのはこれが「限りあらむ道」だからでもある。それゆえ、里邸への退出から死出の道へと帝の論理を廻るように辿るところから死別の悲しみが去来し、その思いを前提に「いかまほしきは命なりけり」という下二句が詠み出されてくるのであろう。この「いかまほしき」は「行く」と「生く」の掛詞であり、桐壺更衣は、死別の悲しみを契機として生への執着を表出したのである。

逆に捉えれば、それまで桐壺更衣の中に自覚されていなかった生への執着が、宮中の掬に抗ってまで更衣を留めようとする帝の姿や言葉に触発されて、ここに湧き上がってきたということになる。前節末に「かく」は歌のなかの生きたいという思いを指すとする『新大系』を引いたところだが、このようにして自覚化されてきた生への執着を踏まえて、更衣は「いとかく思ひたまへましかば」——このような思い（生への執着）を以前から抱いていたならば——と言葉を継いでいくのである。

とするならば、ここに続く婦結部の内容は「このように衰弱し病臥することはなかったのに」というものであり、そこから浮かび上がる心情としては、帝と別れざるを得ない現状に対する悲しみや、どこまでも添い遂げようとする帝への感謝といったものが想定されてくる。具体的に

拙論の考えでは、帝の更衣に対する「死ぬも一緒と誓ったの

にどうして私をおいて退出できようか」という呼びかけに感動して更衣は、帝との最後の別れを悲しく思う今、生きたいと自覚した、という心情を歌に詠み、それに続けて、「もつと早くに心から生きたいと思っていたら……」と述べているのだから、その婦結は（ソウスレバ）こんな別れを迎えずに帝と添い遂げられたでしょうに「あたりにならうかと思う。

とした上野辰義氏や、「もつと強く生きたいと思う意志を持っていたならば、こんな悲しい別れをしなくてすんだのに、と更衣は深い後悔の念にとらわれたのだ」とする妹尾好信氏の解釈が支持されることになる。⁵⁾

それは帝と更衣の心の交流をここに読み取るということであり、その限りで『弄花抄』や『細流抄』の方向は間違っていないかと思われる。しかし、そこから「おそばに参るのではございませんでしたのに」(玉上評釈)「なまじ帝のご寵愛をいただかなければよかつたらうに」(新全集)というところはまだ踏み込んでいってしまふと、かえって二人の間に齟齬を浮かび上がらせることになる。ここで更衣が伝えたかったのは、そのような後悔の念ではなく、あくまでも帝の心遣いへの感謝や共感であったと把握すべきではないか。更衣がさらに言葉が続けようとしていたと考えることは可能だが、その場合でも、二人の連帯を前提としたものだったと想像されるのである。それゆえ、従来の説では、この点がかえって不鮮明になってしまふように思われる。

四

では、ここで強調されるのが帝と更衣の心の交流であるとして、そのことは何を意味するのだろうか。最後にこの点について考えてみたい。

そのさい注意されるのが、当該場面に李夫人の故事を読み取る説の存在である。⁽⁶⁾重視されてよい解釈だと考えるが、しかし、この場面で桐壺更衣の「遺言」が帝に伝わったとは読めない。更衣の言葉に耳にした帝の反応が、「聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧しはてむとおぼしめすに」と記されていくように、この婦結部そのものに帝の関心は向わないのである。帝にとっては、婦結部内容よりも更衣の容態そのものが気になるところであり、先に記したように、ここで強調されるのは二人の交流だと考える。

とはいえ、若宮のことが二人にとつてまったく関心の埒外にあつたとも考えにくい。そもそも、父大納言が死去したにもかかわらず更衣が入内したのは、後に母君の口から

B「(前略)生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、ただ、『この人の宮仕の本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへすがへす諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに出だし立ては

べりしを、身にあまるまでの御心ざしのよろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつまじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、よこさまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になむ」と言ひもやらずむせかへりたまふほどに夜も更けぬ。
(桐壺①三〇〜二)

と説明されているように、故大納言の遺言に従ったためである。そして、その遺言は

C「(帝)「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれに(母君ヲ)思しやる。「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。寿いのちながくとこそ思ひ念ぜぬ」などのたまはず。
(桐壺①三四)

という帝の発言と組み合わせると、若宮立場を視野に入れているものであつたと考えてよいのであろう。帝自身もそのことはずつと気にかけていたようなので、楊貴妃を介して李夫人と桐壺更衣とが重なることからしても、Aの場面で若宮のことが記されても不思議はなかつたと思われる。

にもかかわらず、物語は二人の悲恋物語としての側面を強調するのである。それは何故なのか。

注目したいのは、前掲Bで母君が、一線部に続けて「身にあまる

までの御心ざしのよろづにかたじけなきに」云々と発言している点である。父大納言が亡くなったにもかかわらず更衣がなんとかやってこられたのは、帝の「御心ざし」によるものであった。しかし、そのことで更衣が幸せになれたわけではなく、結局は帝の厚遇がかえって周囲の女性たちの嫉妬を誘発し、更衣の立場を追いつめる結果となっていく。そのために、「かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる」というのである。後ろ盾を持たない更衣に後宮での居場所を与えたのが帝の「御心ざし」であるならば、更衣からその居場所を奪ったのもまた、その同じ「御心ざし」なのであった。

桐壺帝が大切に扱えば扱うほど更衣を窮地に追い詰める結果になる、というこの構造は、有名な物語冒頭の記述とも一致する。注目されているのは男性の愛情であって、それこそが桐壺巻前半の物語世界を動かしていく動因なのである。

もちろん、男性の愛情が無条件で女性を幸せにするなどという甘い幻想を、この物語が抱いているわけではない。むしろ、

D 親たちははや亡せたまひにき。三位中将となん聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、わが身のほどの心もとなさを思すめりしに、命さへたへたまはずなりにし後、はかなきものたよりにて、頭中将なん、まだ少将にものしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、もの怖ぢをわり

なくしたまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて、西の京に御乳母住みはべる所になん這ひ隠れたまへりし。

(夕顔①一八五―六)

と回想される常夏の女(夕顔)と頭中将の恋の結末や、

E 故大納言、内裏に奉らむなどかしこういつきはべりしを、その本意のごくもしはべらで過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿官なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむごとなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。

(若紫①二二二―三)

と説明される紫の上の母の半生など、後ろ盾を持たない女の人生が、現実の人間関係においていかに過酷なものであるかを、物語は繰り返し描き込んでいく。しかし、それゆえにこそ、女性は男性に頼らざるを得ないという矛盾を含んだ関係も浮かび上がることになる。「いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ」(桐壺①一八)と記されているのは、そのような関係に更衣自身も身を置いていたことを示すものである。うし、先の母君の発言もそのような矛盾を指摘したものであった。

このことからすれば、Aの場面で二人の悲恋が強調されているのは、そのような心の交流こそが帝の暴走を助長していくとする物語の認識の反映と捉えられるのではないか。更衣の「遺言」を聞いた

から帝が動くのではない。早く若宮誕生時に「坊にも、ようせずは、この皇子のみたまふべきなめりと、一の皇子の女御は思し疑へり」(桐壺①一九)と弘徽殿女御の様子が記されていたが、このことは、既にこの段階で若宮立坊の意図を帝が有していたことを思わせるし、続けて、更衣に上局を与えたのも、女御への布石ということなのである。このように、更衣への帝の愛情は、当初から暴走していく契機を孕んでいたのである。

更衣の里邸退出を許さず、可能な限り宮中に留め置こうとするのは、更衣への帝の深い愛情を示すものではある。しかし、それは同時に、宮廷の規範に反する行為でもあった。そのような帝の愛情を更衣が受け止めそれへの共感を示すことは、二人の純愛を強調することになる一方で、宮廷の規範を破る方向に帝を向かわせることになってしまう。前者と後者は表裏一体の関係にあり、前者の心の交流が強調されることによって、帝の暴走はさらに加速していくことになる。前掲Cに続けて、

F かの贈物御覽ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの叙ならましかばと思ほすもいとかひなし。

たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく (桐壺①三五)

とあり、帝は「長恨歌」を踏まえた和歌を詠む。ここに明らかのように、帝にとって^{まほろし}まほろしは存在せず、更衣との再会はかなわない。それゆえ、更衣への思いは沈潜していくほかないのだが、そのことは、行き場を失った帝の思いを原動力として、この後の物語が新た

な方向へと進んでいくことを暗示する。この思いを受け止めるのが若宮と藤壺であり、まずは、若宮立坊に向けて動き出すことになるのであった。

この物語にとつて「遺言」が大きな位置を占めることは言うまでもない。しかし、若宮立坊にかんしては、桐壺更衣あるいは故大納言家の遺言実現のためというふうには語られていかない。更衣の願いは帝に既に転移しているのであり、物語はその帝によって切り拓かれていく。そのような物語の語り口に沿ったものとして、帝と更衣の心の交流が強調されているのだと、ひとまず考えておきたい。

注1 このあたりの注釈史や研究史については、小町谷照彦「桐壺巻の和歌

再読」(源氏狭衣の論「花鳥社」二〇二二年)、妹尾好信「桐壺の更衣哀惜と「桐壺の女御」幻想―桐壺の更衣最後の言葉の解釈から中世王朝物語に登場する「桐壺の女御」に及ぶ」(『源氏物語』読解と享受資料考) 新典社二〇一九年)、早乙女利光「桐壺巻―いとかく思う給へましかば」の一解釈―『漢書』元后伝第六十八司馬良娣伝の影響―(『源氏物語の表現技法』武蔵野書院二〇二二年) など参照。

2 注1妹尾論文参照。

3 門前眞一「桐壺の巻―いとかく思う給へましかば―」(『文法から解釋へ―』(山辺道一「一九六〇年三月)、藤河家利昭「桐壺巻の方法―いかまほしきは命なりけり」の歌について―(『源氏物語の源泉受谷の方法』勉誠社一九九五年)、上野辰義「桐壺更衣の造形と人間像―いとかく思う給へましかば」の解釈を中心に―(『源氏物語論攷』新典社二〇二二年) など。なお、門前眞一氏は「かく」を更衣歌の後半を指すと解して、「も」がこれか本當の思ひでしたら、どんなに幸福と、「ごいませうのに、さうは考へられず、さげられぬ死別のことを思ふと、あまりに悲しくつらくて…」と解釈した。この解釈は「まことにかように(右の歌のごとくに)

考えさせていただいてよいのであったら。。(中略) 生きる希望を満たされるならうれしかろうに、そうでないのは悲しく残念だ、と万感を言います」とする『新大系』に引き継がれている(『岩波文庫』も同様)。これは仮想される事態を発話時点のこととして捉えたものだが、「まし」については、時制を過去にずらす『弄花抄』や『細流抄』の説を支持したい。

4 注2 藤河家論文。

5 注2 上野論文、注1 妹尾論文。近年の注釈書では、

「かく」は前の歌の内容を指す。「ましかは」は反美仮想の表現。こういう生死の瀬戸際に立つ前に、そのことがわかっていたならばの意。それに応ずる後文は具体的に表現されていないが、「聞こえまほしげなることはありげなれど」から推察可能。この前後の「まほしげ」「ありげ」「苦しげ」「たゆげ」等、接尾語「げ」の機能を生かした表現に注意しなければならぬ。即ちこれまで周囲の人々の思惑に気兼ねしながら過ごして来たが、もつと自己の心に従順に帝との愛に徹すればよかつたと思う後悔の念が、更衣の表情に現れているのである。「給へ(下二)」は謙讓の「給ふ」の未然形。

とする『源氏物語注釈』の読み取りが支持される。

6 藤井貞和「光源氏物語の発達の成立」(『源氏物語の始原と現在』砂子屋書房一九九〇年)、新聞一美「李夫人と桐壺巻」(『源氏物語と白居易の文学』和泉書院二〇〇三年)など参照。

7 このあたりの問題については、島田とよ子「桐壺更衣―女御昇格を中心に―」(『園田国文』二〇〇一年三月)、高橋麻織「光源氏立太子の可能性―桐壺更衣の女御昇格―」(『源氏物語の政治学』笠間書院二〇一六年)、浅尾広良「女御・更衣と賜姓源氏―桐壺巻の歴史意識―」(『源氏物語の皇統と論理』翰林書房二〇一六年)など参照。

※本文の引用は、『源氏物語』『古今和歌集』『万葉集』『落窪物語』『夜の寝覚』『蜻蛉日記』は新編日本古典文学全集(小学館)に、『うつほ物語』は『うつほ物語 全』(改訂版、おうふう)に、『後撰和歌集』『伊勢集』『実方集』

は新日本古典文学大系(岩波書店)によつたが、表記を私に改めたところがある。

(よしだ・みきお 本学教授)